

戦国金山伝説の実像

戦国時代における金銀貨幣の形成と鉱山開発

東京大学大学院人文社会系研究科・文学部教授 今村啓爾

戦国時代、各地の戦国武将たちは、軍資金確保のため鉱山を積極的に開発し、金、銀の生産量は飛躍的に増大しました。甲斐の武田氏の甲州金は、日本の金貨のルーツとされ、武田家滅亡の悲話とともに、多くの黄金伝説が今に伝わっています。中でも黒川金山は採掘量が多く、戦国最強と評される武田軍の財政を陰で支えたとされます。金山の経営にあたった「金山衆」は、武士も兼ねた最高の技術を持った職業集団であり、戦の際には工作部隊としての任務にも就いていた記録が残っています。今回は、黒川金山の発掘調査によって、伝説の通り、武田信玄の時代に金山が全盛期を迎えたことを実証された今村啓爾先生に、当時の金山の実像をよみがえらせていただきました。

監修／東京大学大学院総合文化研究科准教授 桜井英治

(一両小判、一分金、一朱金などで、これらは貨幣の価値単位に転じた) 制度の参考にされたと考えられています。戦国時代に甲州で金貨の使用が顕著であったことや、徳川家が甲州を領有した後、その地の守随秤(しゆずいばかり)を関東一円の標準として採用したことなどを考えると、そのつながりは否定できません。

銀貨のほうは甲州にはなかったのですが、江戸時代になっても重量を一定にしないままの丁銀や豆板銀として続きました。それを五〇〇匁で厳封し、中身を保証する印が押された形で用い

日本の金貨のルーツ 甲州金



甲州金は長く鑄造された金貨であり、古甲金と、元禄8年(1695年)以後改鑄された新甲金に分けられる。山梨県勝沼町福地で出土したこの粒金と判金は、古甲金誕生前夜のもものとみられる(写真提供:今村啓爾氏)。

甲斐武田氏の領国貨幣のひとつ「露一両金」。甲州金の貨幣単位のうち、両、分(=1/4両)、朱(=1/4分)が江戸時代幣制の金貨の単位として踏襲された(貨幣博物館所蔵)。

戦国時代にはそれまでの宋銭・明銭に加えて、いくつかの地域で高額貨幣である金貨や銀貨の使用が始まりました。金貨や銀貨といってもそれぞれ形を整えたものではなく、金や銀を粒状に丸めたり平たく打ち延ばしたりしたものを秤って、地金の価値で売買に用

いたものです。戦国時代の金貨で有名なのは甲州金で、当初は粒状や打ち延ばしただけのものでしたが、江戸時代に入るところから量目や鑄造者の印を刻したものが作られ、江戸時代を通じて唯一の領国金貨として流通を認められました。甲州金の一両が四分、一分が四朱(銖)という単位は当時の重量単位にすぎなかったのですが、江戸幕府の金貨



黒川金山は、山梨県の東北部に位置する。昼なお暗い樹木の生い茂った山の斜面での測量や発掘作業は困難を極めた(写真提供:今村啓爾氏)。



物質資料からどこまで歴史を復元できるか考古学の可能性を追求し、日本の文化の本質をとらえる今村啓爾先生。主な著書に『戦国金山伝説を掘る』（平凡社1997年）など。



A地点の坑口前での発掘作業風景。陶磁器の破片や銅銭、キセルなど生々しい生活を感じさせる遺物が次々と出土した（右）。D地点からは熔融物が付着したかわらけと炭が多数出土し、製錬その他に関係した火を使った作業場であったと考えられている（上）（写真提供：今村啓爾氏）。



られることも多かったようです。

このような江戸時代幣制の原型になった戦国時代金銀貨は、大名の鉱山開発と密接な関係がありますが、金貨や金山ということになると何といっても甲斐武田氏が有名で、武田氏の強勢の理由のひとつがこの金にあったとも言われています。ここでは甲州金山の代表格といつてよい黒川金山の発掘調査と地元旧家に伝わる古文書の研究が明らかにしたこの鉱山の実像を紹介し、貴金属貨幣の誕生について考えていきたいと思います。

黒川金山遺跡は、山梨県塩山市の東部、多摩川源流域にそびえる鶏冠山（一七一〇m）の東面、黒川谷の森林中に眠っています。今は訪れる人も稀な深山ですが、足を踏み入れると、居住地としての谷の両岸に築かれた広大なテラス群、半ば埋もれた坑口、散乱する鉱石粉砕用の石臼が過去の繁栄を語りかけてきます。この廃墟の圧倒的な規模と保存の良さ、そして何よりも鉱山史における重要性に魅せられた私が日本史学の桜井英治氏（現東京大学総合文化研究科准教授）や東大・学習院大・武蔵

野美大の学生たちを誘って共同調査を開始したのは一九八六年のことでした。発掘調査は、すべての必要機材を人力で担ぎ上げ、遺跡

現地にテント村を設営する厳しい作業から開始されました。森林の中で鳥の声に目覚め、沢の水で顔を洗い、測量や発掘作業という労働が終わった夜は、酒を酌み交わし、語り合い、眠くなると寝袋にもぐりこむ生活が今では懐かしい思い出です。調査は夏だけですが四年間続き、さらに六年の整理分析を経て、一九九七年に報告書刊行にこぎ着けることができました（黒川金山遺跡研究会『甲斐黒川金山』塩山市一九九七年）。またその歴史的重要性が文化庁によって認められ、同年国の史跡に指定されたことは、この遺跡の調査、記録に携わった者としてとくに嬉しいことでした。

鉱山町の実態

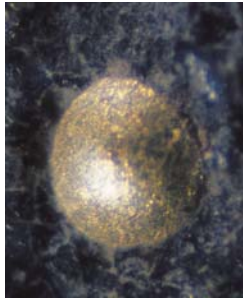
「黒川千軒」と言い伝えられる鉱山町の規模が、黒川の谷に沿って上下六〇〇m、最大幅三〇〇mに及ぶことは、居住用テラスとその土留めの石垣の分布によって知

られています。三〇〇段を超えるテラスの数からみて、最大時の人口は千人近くに及んだでしょう。遺跡全体の測量調査に続くA～Iの九地点を選定して行った発掘調査は、この大遺跡のわずか三〇〇分の一面積を掘ったにすぎませんが、坑道、鉱石の粉砕作業場、金の熔融作業場、管理者の居住地、墓などが確認され、この鉱山町の構造が的確に解明されました。

各地点からは当時の生活を物語る様々な遺物類——土器・陶磁器・銅銭・きせる・かんざし・刀子・はさみ・火打ち金・つりばり・碁石・鉄砲玉・粉挽き臼・茶臼・石仏台座・五輪塔などが出土しました。近年飛躍的に進んだ中・近世陶磁器研究の成果をたよりに鉱山町の年代を推定すると、一六世紀前半、一五三〇年には出現しており、一七世紀中頃に姿を消したことがわかります。全盛期は伝説に言うように武田信玄の時代だったのです。

古文書研究と考古学の協力

近年、遺跡の発掘と古文書による歴史学の共同研究が盛んになっ



沢の中の石臼。鉱石の磨り潰しに使用し、その面にドーナツ型の磨り減りができているのが見て取れる(右)。金を溶融した土器内部に残る金粒(左)。得られた金粒は素焼きのかわらけで溶融して粒金にされた(写真提供：今村啓爾氏)。

ます。ただ唯一の、そして重要な例外は、この金山の最盛期が古文書の残されていない、記録以前の時期にあったことで、それは考古学調査によってはじめて明らかにされた事実です。

独自に開拓された鉱山技術

考古学にはその対象とする時代や遺跡の性質によって研究の鍵となる種類の遺物がありますが、鉱山の考古学の場合それは鉱石の粉砕用石臼です。地味な遺物ですが、どの鉱山でも大量に用いられ、固い鉱石の粉砕作業で消耗して大量に捨てられ、残っています。この点に注目した私は、黒川千軒遺跡の調査と並行して全国二〇以上の鉱山遺跡で鉱山臼を調査し、次のような変遷を明らかにしました。まず鉱石を自然の平石の上に置き、手に持った磨り石ですり潰すという原始的な方法から始まり、次に回転式の臼がこれに代わります。そして一七世紀の初頭には回転式の臼に軸受が採用されました。この主要な変化以外にもいろいろと細かい工夫がなされています。黒川の石臼は第一段階のものが主で、

第二段階のものが少しあります。第三段階のものは佐渡相川金山などで使われていました。

微粉砕した鉱石は流水によって選鉱され、得られた金粒は、日常生活で用いられたのと同じ何の変哲もない土器の皿で溶融し、金餅状にされました。黒川金山におけるこのような粗末な道具立ては、当時まだ鉱山用具として特別なものが発達しておらず、試行錯誤で金の採掘・製錬が開始されたことを物語っています。この地で独自に金の坑道掘りが開始されたと考えられます。また、最終的な金の溶融作業が小グループごとに行われていたことも考古学調査によって明らかになりましたが、これは、金山衆という鉱山稼業者が豪農と未分化な存在であったという古文書調査の結果とも合致します。いずれも近世の専門化した鉱山経営とは異なる古い側面といえるでしょう。

鉱山技術の展開

金山衆はそのトンネル掘削技術をかわれ、戦争における特殊工作部隊としても活躍し、やがて武士

としての身分を獲得していきます。しかしあくまで鉱山経営者としての道を進もうとした金山衆もいました。多様な性格を合わせもった金山衆も、中世から近世への社会変化の中で、官吏・農民・鉱山経営者・職人としての身分の明確化を果たさなければなりませんでした。

黒川金山は勝頼が武田家を継いだ一六世紀末には急速に衰退し、有力金山衆はこの地を去りました。一七世紀、江戸時代に入るともはや金は産出しなかったようですが、金山再興を願って居残った金掘りたちは、土木工事の請負などで生計を立てていました。有名な猿橋の掛け替え工事などに特殊技能を発揮していたことが知られています。歴史的に重要なものは、黒川など甲州で開発された技術が江戸時代に各地の鉱山に应用され、一七世紀の日本を世界有数の金銀産出国に変え、江戸幕府の財政確立に貢献したことです。また、黒川出身の永田茂右衛門の常陸の国の用水工事における活躍は、この鉱山で生まれた技術が水田開発にも応用されたことを物語っています。

赤字=日本 黒字=世界

西暦

室町

日本・世界

戦国

1500

1550

安土・桃山

1600

江戸

- 1467 応仁の乱
 - 明、撰銭行為盛んに
 - 私鑄銭の著しい増加、撰銭行為盛んに
- 1479 スペイン王国成立
- 1485 最初の撰銭令（周防大内氏）
- 1492 コロンブス、アメリカ到達
 - 明中期、偽「古銭」の私鑄が流行
- 1500～13 幕府、撰銭令発令を繰り返す
 - 東日本で金山開発はじまる
 - 大航海時代による国際商業の活発化
- 1510 ポルトガル、ゴア占領
- 1517 ルターの宗教改革
- 1519 ヨアヒムスターレル銀貨発行
- 1519～22 マゼラン、世界周航
- 1523 寧波の乱
 - 黒川金山全盛期を迎える
- 1533 石見銀山に灰吹法が導入される
- 1534 イエズス会創立
- 1540頃 明、大量の銀流入、銀遣いへの傾斜
- 1542～69 幕府諸侯しばしば撰銭令布令
- 1543 鉄砲が伝わる
- 1547 最後の勘合船出帆
- 1549 ザビエル、キリスト教を伝える
 - 武田氏領国で「甲州金」使用される
 - 倭寇の活動活発化（後期倭寇）
- 1557頃 ポルトガル、マカオ居住権獲得
- 1560 桶狭間の戦い
- 1567年前後 明軍による倭寇の拠点制圧
- 1569 織田信長、撰銭令
- 1571 スペイン人、マニラ建設
- 1570年代 中国への南米銀流入開始
- 1570年代 銀による建値始まる
- 1573 室町幕府滅亡
- 1575 長篠の合戦
- 1576 織田信長安土城築城
- 1582 本能寺の変
- 1582～98 太閤検地
 - 石高制の確立
- 1584 スペイン人平戸来航（貿易開始）
- 1588 海賊取締令（倭寇の禁止）
- 1588 豊臣秀吉、「天正大判」鑄造
- 1588 イギリスがスペイン無敵艦隊を破る
- 1590 秀吉全国統一完成
- 1592 秀吉朝鮮出兵（文禄の役）
- 1597 秀吉朝鮮出兵（慶長の役）
 - 伊勢国で山田羽書流通
- 1600 関ヶ原の戦い
- 1600 イギリス、東インド会社設立
- 1601 慶長金銀貨発行
- 1603 江戸幕府成立



甲州金の一分金（15×15mm・左）と糸目金（8×5mm・右）。語源は諸説あるが、「太鼓判を押す」は、甲州金に太鼓の皮を留める鋳のような装飾があるもの（＝太鼓判）が存在したことから、甲州金の品質の高さに基づいて生まれたという説がある。また、「金に糸目をつけない」は、甲州金の端数単位である「糸目」をつけないという意味が転じて、金品を惜しげもなく使うという意味になったという説もある。

戦国大名は富国強兵を図り、競って領内の鉱山開発を進めた。この時代に進歩した鉱山技術は、江戸時代初期の鉱山開発ブームと結びつき、日本は世界有数の鉱産国となっていく。江戸時代の初め、日本の銀輸出量は一年に二〇万kgにも達し、全世界の産額の三分の一を占めるほどに成長していったのである。

一方、一五七〇年前後におきた中国からの銅銭供給の途絶により、銭経済は破綻。西日本では、銭経済が放棄されそれに代わる支払い手段として一時的に米が使用されたのち、銀遣いに急速に転換していった。これは、大内氏や大友氏など西日本の戦国

大名の多くが、銀を国際通貨とする東アジア貿易に直接参入していたことや、石見大森のほか、但馬生野など主要銀山が西日本に集中していたことなどが影響したためと考えられる。それに比べて外国貿易にかかわる大名がほとんどいなかった東日本では、甲斐の黒川、駿河、伊豆、佐渡相川金銀山などの良好な金山を背景に、金遣いへと向かっていった。

この時代、上杉・武田氏などの戦国大名は領国貨幣として、品位のみが標準化された秤量貨幣である金貨を鑄造している。豊臣氏の発行した天正大判は量目・品位とも一定に鑄造されたが、もっぱら賞賜・贈答

用であり通貨としての機能は乏しかった。そんな中、徳川氏は一六世紀末には、のちの金座支配人・後藤庄三郎に領内向けの小判や一分金を鑄造させており、三貨制度の確立に向けた動きは既に開始されていたのである。



一分銅金。戦など非常時の備蓄用として鑄造されたといわれる重量100匁（375g）の金塊（上）。秀吉がつくらせた天正大判。この大判は長径約17cm、短径約10cmある（右）。



ます。遺跡現地でも水抜き坑道とみられるものの存在が確認されていますが、坑道掘削技術と用水

工事の技術は双子の関係にあったといえます。貨幣の歴史を考える際にも、それを支えるこのような

多くの技術者たちの存在があったことを忘れてはならないでしょう。